第41号
平成30年8月1日発行

かながわ 助産師職能だより

公益社団法人神奈川県看護協会 助産師職能委員会　発行責任者　佐藤 良枝
〒231-0037 横浜市中区富士見町3-1　TEL：045(263)2901　FAX：045(263)2905
E-mail kanakan1@basil.ocn.ne.jp　URL http://www.kana-kango.or.jp

ごあいさつ

助産師職能委員長
佐藤 良枝

会員の皆様、こんにちは。

日頃より、助産師職能委員会の活動にご協力をいただきましてありがとうございます。平成29年度の活動状況をこのようなかたちで会員の皆様にお伝えできることを大変うれしく思っています。

さて、平成30年度公益社団法人神奈川県看護協会通常総会を終え、新たな気持ちで委員長として3期目もスタートしていきたいと思います。

昨年度は、周産期のメンタルヘルスをスタートとし、アドバンス助産師® 認定に関する研修だけでなく、思春期の性教育など助産師として学んでおきたいことも盛り込みました。地域の中で、助産師として活躍している講師の話を聞き、病院勤務では得られない知識を得ることもでき、大変勉強になりました。

今年は、診療報酬および介護報酬の改定の年です。診療報酬の改定では、新たに妊婦加算や乳腺炎重症化予防ケア・指導料が新設されました。特に、乳腺炎重症化予防ケア・指導料の施設基準の「専任の助産師」とは「アドバンス助産師® である」といわれており、ようやくアドバンス助産師®の活動が承認されたことになります。非常にうれしいことです。また、申請が中止されていたアドバンス助産師® の認定も申請条件が見直され、再開されます。さらに、2020年度のはじめての更新に向け、更新条件も発表されています。詳細は、一般財団法人日本助産評価機構のホームページをご参照ください。

私たち委員会ではそれを踏まえ、多くの方がアドバンス助産師® の申請および更新できるように、今年も研修会の企画や申請のサポートをしていきたいと思います。

ぜひ、多くの方に研修参加をいただき、当委員会の活動についてもご意見をいただきながら、会員の助産師の皆様方とともに助産師の発展に向けて努力していきたいと思います。

今後ともよろしくお願い致します。

平成30年度　助産師職能委員紹介

助産師職能委員長	佐藤 良枝	会　計	小澤 彩
副委員長	小川 喜美子		川邊 康子
書　記	鍋倉 幸		柳澤 裕美
	長澤 聖子		山下 祐子
	藤村 恵美	広　報	金 スリョン

*** 平成 30 年度 ***
助産師
職能研修予定

（敬称略）

助産師職能集会・講演会

母乳育児支援
～妊娠期・産褥期における乳房ケアの実際～

開催日◆ 平成 30 年 7 月 26 日

講　師◆ みやした助産院　宮下 美代子

新生児フィジカルアセスメント

開催日◆ 平成 30 年 10 月 19 日

講　師◆ 横浜市立大学附属市民総合医療センター　関 和男

周産期のメンタルヘルス

開催日◆ 平成 30 年 11 月 16 日

講　師◆ 群馬大学 常盤 洋子

産科救急 ～出血時の対応～

開催日◆ 平成 31 年 1 月 25 日

講　師◆ 横浜市立大学附属市民総合医療センター　榎本 紀美子

妊娠期からの栄養

開催日◆ 平成 31 年 2 月 21 日

講　師◆ 神奈川県保健福祉大学 中村 丁次

*** 平成 29 年度 ***
助産師職能委員会 活動及び研修会 報告

H29 年	4月28日(金)	職能委員会
	5月26日(金)	職能委員会
	6月16日(金)	職能委員会
	7月28日(金)	職能委員会・職能集会 講演会「周産期メンタルヘルス」 ◆済生会横浜市東部病院　臨床心理士・助産師　相川 祐里
	8月25日(金)	職能委員会
	9月22日(金)	職能委員会
	10月27日(金)	職能委員会・研修会「新生児フィジカルアセスメント」 ◆横浜市立大学附属市民総合医療センター 総合周産期母子医療センター部長　准教授　関 和男
	11月24日(金)	職能委員会
	12月15日(金)	職能委員会・研修会「思春期の性教育」 ◆一般社団法人子育てサポートハウス marimo 助産院 代表理事　中島 清美
H30 年	1月26日(金)	職能委員会・研修会「産科救急～出血時の対応」 ◆横浜市立大学附属市民総合医療センター 総合周産期母子医療センター 助教　榎本 紀美子
	2月23日(金)	職能委員会・研修会「児童虐待」「虐待が子どもに何をもたらすのか」 ◆日本体育大学　スポーツ文化学部武道教育学科　准教授　南部 さおり ◆ノンフィクション作家　黒川 祥子
	3月16日(金)	職能委員会

Voice1

メンタルリスクのある妊産婦へのケア

助産師だからできること―育児支援から虐待予防まで―を受けて

平塚市民病院◆田中 郁恵

メンタルリスクのある妊産婦に対してどのように関わったら良いか迷うときがあるため、研修で何か知識を得ることができたらと思い今回参加させて頂きました。

講義では、なぜ周産期の心のケアが大切かということを「子どもへの虐待予防の側面」と「母親の自殺予防の側面」から考えるということを学びました。

虐待をした理由として、ストレスや育児不安というメンタル的な理由があること、妊産婦の死亡原因の第１位は自殺であり、出血などによる死亡率の２倍であることを知り、メンタルケアの重要性をとても感じました。

助産師は、悪くなってから登場する専門職ではなく、問題が起こる前から関われる存在であることが強みであるため、妊娠期の関わりをより大事にしていこうと思いました。

周産期に起こりやすい心のトラブルの対処方法に、「聴く」ことで心のメンテナンス・平常の状態に戻すということがあります。

「聴く」ために、視線を置くところ、言葉と表情を一致させる、会話のペースを相手に合わせる、共感を言葉で表すといったポイントを教わり、妊産婦へ実際関わるときに意識してみようと思いました。

３人１グループになり、妊婦・助産師役・観察者として役割分担をし、「育児支援チェックリスト」「エジンバラ産後うつ病質問票」「赤ちゃんへの気持ち質問票」の３つの質問票を使いながら事例に沿ってロールプレイングをしました。

実際の妊婦の表情や様子をイメージしながら助産師役を行いました。講義で教わったポイントを踏まえて行うことで、難しさを実感する反面、アセスメントの視点が広がったように感じました。

今回研修に参加したことで、メンタルリスクのある妊産婦との関わりに少し自信を持つことができました。学んだことを実際に活かして支援に繋げられるよう努力していきたいと思います。

Voice 2 新生児のフィジカルアセスメント 助産師職能研修会へ参加して

横須賀共済病院◆中村 綾美

私は、助産師として勤務する中で、母児の健康を見守りケアするということの難しさを実感しています。特に産科病棟において数多くの新生児と接する中で、その生理的変化の特徴をふまえ、変化も著しい時期に、児の異常を見極めることに対して悩むことも多いのが事実です。今回の研修も、日々悩んでいることが解決できればと期待をもって参加させていただきました。

以前、関先生の講義を聴講させていただいた際に、とても感銘を受けました。今回も先生の講義が聴けるということでとても楽しみにしていました。今回の新生児のフィジカルアセスメントの講義は、助産師にとって必要不可欠な内容であり、知識を再確認するのに役立ちました。さらに、先生の経験や知識を織り交ぜながら話してくださった事例などから、私自身の拙い経験などを思い出し、新生児への対応や医師との連携などのケアの振り返りをする機会となりました。新生児のフィジカルアセスメントは、知識だけでは不十分であることも今回の講義でさらに感じました。また、日々、病棟業務の中で新生児の劇的な変化に慣れてしまっていたことにも改めて気づかされました。今後は、今回の講義での学びを活かしながら、いろんな事例に対し、医師や他スタッフとともに新生児のケアに従事して行きたいと思います。

Voice 3 思春期の性教育研修での学び

医療法人弘徳会 愛光病院◆石山 清和

私は現在、精神科単科の病院で勤務していますが、以前より精神科病棟でどのような性教育を提供していく事が望ましいのか考えていました。そして、私自身も性教育を受けてから数十年が経ち近年の子どもに対する正しい性教育について知り、この機会を通して病棟で行う性教育の基礎となるものを作り性教育が行える人材を育成したいと思い参加しました。

病棟は、成人のストレス系の病棟の他に 11 床の思春期病床を併設し、患者の多くは病状により不登校になり学校で性教育を受けられずに過ごしてきています。また、自尊心や自己肯定感が低く自分を大切にしない言動や行動をとることもみられます。患者によっては入院期間が長くなることで身体の成長の変化による戸惑いや悩みを持ち、性に対する意識も高まり適切に対処できないことも多くあります。患者の年齢や背景も様々なため、受け持ち看護師が個別に性教育を行っているのが現状です。中島先生が学校で行っている性教育の話を聞いていると、多少の恥ずかしさはあるものの、オープンに楽しく真剣に性教育を行っているように感じました。また、性教育の中に命の大切さを教えることも重要なことであるともわかりました。今、病棟で行っている性教育は、どちらかというと部分的な性教育であり、一時的には知識が深まり対処行動はとれますが、中島先生が言われていた「自分も相手も大切に思える」という心を育むには不十分のような気がしました。

病棟スタッフは日頃より、患者の難なくできているところに着目し褒め認め、自尊心や自己肯定感が高まるように関わっています。今回、中島先生が話されていたように性教育の中にも命の大切さを織り交ぜていくことはこの思春期病棟においても効果的であると思いました。今後は研修での学びを活かし、性教育を通しても自尊心や自己肯定感が高まり、自分も相手も大切に考えられる心が形成されるような性教育に取り組んでいきたいと思います。

Voice 4 産科救急～出血時の対応

川崎市立川崎病院◆倉原 愛未

私は３次救急医療機関に勤務しており、分娩後大出血に遭遇することも少なくありません。今回の研修を通して自己の対応を振り返ると共に、スキルアップを目的として研修に参加しました。

研修では講義に加え、産科危機的出血に対応するデモンストレーションも行われました。インストラクターの方達のデモンストレーションは、たいへん臨場感のあるもので、現場で実際に起こりうるケースとして身に迫るものでした。現実にこのような症例をまのあたりにした時、自分はどう動けるだろうか、他のスタッフとどう声をかけあって患者さんを救急すればよいのかと１つ１つ確認しながら学ぶことができました。緊急時はチームワークが重要であり、常日頃より行うことでスムーズな対応ができるのだと思います。

研修に参加することで、自信をもって大出血の場面で対応出来ると思いました。自分が積極的にリーダーとしての役割を発揮できるよう、研修での学びを基にさらにスキルアップしていきたいと思います。

Voice 5 児童虐待における医療者の役割

神奈川県立こども医療センター◆石﨑 絢香

今回の研修会では、代理ミュンヒハウゼン症候群や児童虐待の実態、虐待を受けた子どもたちのその後の生活について学びを深めた。代理ミュンヒハウゼン症候群とは、親が子どもを病気であるように仕立て上げることで、子どもを医療者に繋ぎ留め、本来は不必要で有害な医学的処置を繰り返し受けさせる虐待である。聞いたことのある名前だったが、明確に知らない部分も多かった。実際、今回の研修会の参加者の中にも、代理ミュンヒハウゼン症候群を聞いた事がある人や説明ができる人はそう多くはいなく、医療現場でも認知度が低いと感じた。また、代理ミュンヒハウゼン症候群という名前が一見病名のように感じるため、混乱が生じやすいのではないかと思った。しかし、医療現場で起こる虐待であるため、医療者である我々は代理ミュンヒハウゼン症候群について理解を広めていく事が重要であると思った。また、今回の研修会では虐待を受けた子どものその後の生活についても話を聞くことが出来た。虐待はその行為のみではなく、その子どもの今後にも大きく影響していくため、地域で支えていくことや切れ目のない支援をしていくことは大切であると考える。

研修会で印象に残っているのは、『母親という重圧』という言葉だ。研修会の中で、「子育てに重圧を感じるのは特殊な母親のみではなく、どの母親にもあり得る」と語られていた。私はまだ育児経験はないが、仕事で子どもと関わったり、様々な情報を得る中で、育児とは想像以上に大変なのだと感じる。実際に、育児をしている友人の中には、育児の大変さを話す者や気持ちが滅入る時もあると話す者がいる。周りに頼れる人や気持ちを吐き出せる人がいると心にも少し余裕ができるのかもしれないが、そうでない場合は母親にかなりの心身の負担が生じるのではないかと考える。我々は、家族や養育者に寄り添い、サポートしていく事が必要であると感じた。

Voice 6 『虐待が子どもになにをもたらすのか』研修に参加して

湘南藤沢徳洲会病院◆熊切 香菜恵

近年増加している児童虐待予防に、勤務助産師として何が出来るのか?といった課題に直面する事も増え、この研修に参加させていただきました。

研修では、黒川先生の取材や当事者の方々との関わりを通して得た実際の問題点や現状をお話くださいました。虐待を受けた子どもたちがその後どのような生活を送っているのか、心にどのような傷を抱えながら生活していくのか、ということを体験談や実際に当事者の方々が語られた言葉を用いてお話して下さり、虐待を受けた後の辛さを知ることが出来、とても心に響く研修でした。

印象に残ったのは「愛を築き、自分を大切にすることを知っているかが大切」という言葉です。虐待を受けて育った方がその後どのような人々に出会い、自己肯定感を持つことが出来るかどうかで虐待を受けた過去から前に進めるかどうかが変わってくるという事でした。このお話をうかがって、育児に立ち向かう親がまず自己を認め、自信を持てるように関わることが重要なのではないかと実感しました。

親として弱音を吐くことや、自身の育児に自信を持つこと・認めてもらうことはとてもハードルが高く、多くの方が日々不安や失敗を抱えながら育児に向き合っているのではないかと思います。その関わりの中で、虐待に発展することなく母子の健康な発達を支えるケアの一端を担うためにはどうしたら良いのか、課題は尽きませんが、日々の実践の中で育児の不安や上手く関われなかったことを相談しやすく、一緒に悩み考えながら母子を見守り、共に歩んでいける助産ケアが提供できるような助産師でありたいと思いました。

また、病院と地域の連携の大切さについても多くの意見や知識を共有する場ともなり、職場での地域連携の充実に向け取り組むパワーをいただくことが出来ました。

平成 29 年度　助産師職能委員紹介

助産師職能委員長	佐藤 良枝	会　計	小澤 彩
副委員長	舛谷 寛子		川邊 康子
書　記	小川 喜美子		中島 久枝
	藤村 恵美		柳澤 裕美
			山下 祐子
		広　報	金 スリョン

かながわ助産師職能だより
第 41 号　平成 30 年 8 月 1 日発行

編集後記◆平成 29 年度助産師職能委員会が開催した事業のトピックスをまとめることができました。ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。